
腕時計

咲蘭保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

腕時計

【Zコード】

Z3572Y

【作者名】

咲蘭保

【あらすじ】

大切な姉を失った宮野志保。

そんな志保を守る工藤新一。

砂時計の話を名探偵コナンの新志風にした作品です。
新一と志保の切ない恋愛を書いています。

始めに（前書き）

名探偵コナンと砂時計のコラボ作品。
砂時計の登場人物に名探偵コナンの登場人物を当てはめてみました。
カツプリングは主に新志です。
快志もあり。

始めに

設定

植草杏 = 富野志保

北村大悟 = 工藤新一

月島藤 = 黒羽快斗

月島椎香 = 毛利蘭（砂時計の原作では藤と椎香は兄妹ですが快斗と蘭は親友です。）

杏の母親 = 富野明美

杏の祖母 = 阿笠博士

楳崎歩 = 前本茜「オリキヤラ」

月島茉莉子 = 中森青子

友達A = 鈴木園子

遠藤 = 本堂瑛佑

・「ミックをもとに書いて書くので台詞が多くなると思います。

・砂時計をもとにしていますが、登場人物の性格はほとんど名探偵コナンのままです。

・無理やりな設定もあると思います。

以上の条件でも読んでみたいという方は1話から読んで見てください。

1話・19歳夏・神鳴

『俺が守つてやつから。』

組織を潰して一年半。宮野志保19歳、夏。

私と工藤くんは組織と決着がついたあと、完成した解毒剤を飲み、元の姿に戻った。

私たちの正体については今まで深くかかわった人たちだけに話し、その後、私は転校生として帝丹高校へ通うことになった。

転校初日に私は蘭さんに声をかけられ、友達になつた。

工藤くんは元に戻つてから、蘭さんに告白することもなく、以前と同じように《幼馴染》の関係を続けていた。

二人は以前から恋人、などと噂されていたらしいが今ではそんな話を全くと言つていいくほど聞かない。

私の知らない間に何かあったのだろうか、とも考えたが二人の関係に私が口出しするのもよくない、と思い

私は何も聞かなかつた。

志保「ねえ、工藤くんいる？」

そう言って、私が声をかけたのはサッカー部のマネージャー前本茜だ。

工藤くんは復帰しても部活には入らなかつたが、たまにサッカー部に顔を出す。

今日も朝から朝練に参加している。

こうして、工藤くんが朝から練習に参加するときは私が彼の分の弁当を作つて持つてくる。

茜「今、練習中よ。弁当なら私が渡しておくから。」

蘭さんと工藤くんの噂がなくなつてから工藤くんにアピールする女子が増えだした。

どうやら彼女もそのうちの一人らしい。

志保「じゃあ、よろしくね。」

前本さんは私から大きな弁当箱を受け取り、笑顔で工藤くんにそれを持って行く。

志保（・・・はあ。）

思わずため息をついてしまつた。正直言うと、私が渡したかった。でも、そんなこと私が言えるわけがない。もう一度、はあ、とため息をつくる。

そして、体をぐるり、と回転させグラウンドを出ようとした。そのときおーい、と少し離れたところから声がした。工藤くんだ。彼は走つて私のところに向かってきていたのが見えた。

新一「志保、弁当サンキュー。」

志保「別に。私のついでだから。じゃあね。」

私は工藤くんに背を向けた。

すると、腕をギュッと掴まれ、彼と向かい合つた。

新一「あのや」

彼は元の姿に戻り、手足にしつかりとした筋肉がついている。手も、ゴツゴツとしていて

江戸川くんだったころより、男らしさが出ている。

私たちから少し離れたところで前本さんがこちらを睨んでいるのがわかる。

新一「聞いてるか?」

志保一
え？

新一「これ……修学旅行の話だけと田舎時間 薙ヶ原快斗たちと一緒に回らねーか?」

志保「考えとくわ。それじや。」

私はそっけなく返事をし、再び工藤くんに背中を向ける。そして、私が歩き始めたとき、次は肩をつかまれた。私は思わず肩に置かれた手を払いのけてしまった。

新一(にわん)

「俺、今日も田暮警部に呼び出し受けたるから蘭たちと勝手にマース決めといてくれ。」

志保「はいはい！」

「うわー」「山だ」「山ばかりだ」「高校生にもなつて修学旅行が山なんてな。小学生の遠足じゃあるまいし。」「

クラスの男子たちは愚痴をこぼしている。

私の横でも一人、ブツブツ言っている人が。

新一「つたぐ、これじゃあ修学旅行つてよりキャンプじゃねーか。

今日だつてテント張つて寝るんだろ?」

志保「今更、何文句言つてるのよ。あなただつてこいつの好きじやない。

小学生のこりはあなたもそれなりに楽しそうだったわ

よ。」

新一「うるせー。」

こりして一人並んで小声で話すのは小学生の頃と変わらない。でも、この光景を遠くから睨んでいる人もいる。

私はその視線に気づいて自然と工藤くんから離れていく。

志保（はあ、面倒だわ。）

蘭「志保ちゃん、テント建てるよー。」

十五分ほどしてテントは建て終わった。

蘭「やつと終わつたね。」

園子「でも、雨降りそうじゃない?」

志保「あ・・・降つてきたわ。」

最初はポツ、ポツと降っていた雨も次第に大雨になつていた。

遠くで、「テント片付けろー! キャビンに集合ー」という先生の声が聞こえる。

園子「今、テント建てたばかりなのに。」

志保「仕方ないわね。」

- - - - -
快斗SIDE~

『雨と雷がひどいので安全のため今夜は全員キャビンで寝ることになりました。』

順番にシャワーをあびて今夜はゆっくり休んでください。』

先生にそう言われて、生徒はみなキャビンに戻った。

俺の周りでは、部屋で寝れるからよかったです、という人もいればせっかくキャンプ気分を楽しむつもりだったのに・・・と文句を言つているやつもいる。

少なくとも俺はあんなジメジメしたところでテントを張つて寝るより、

部屋にふとんを敷いて、ゆっくりできるほうがいいこと理解。

カツ！…ガラガラ

「うおっ

「みつ見たか、今の！落ちたんじゃねーか？」

快斗（はあ、つるせー・・・寝られねーし。）

せっかく、ゆっくり寝れると思つたのに同じ部屋のやつらは大騒ぎをしてやがる。

俺はなんだかイライラしてきて、部屋を出た。

部屋にいても同じ部屋の子たちは恋の話で盛り上がっていた。
当然私はそんな話に入つていけるわけもなく、
1人部屋を出て、廊下の窓の外の様子を眺めていた。
すると、男子部屋がある方から誰かが歩いてくる気配がした。
暗くて、最初は顔が見えなかつたけど、
その人との距離が短くなるとその人物の正体が分かつた。

志保「黒羽くん。どうしたの？」

快斗「？志保？いやー雷がうるさいし、へやのやつらもうるさいし
で眠れなくて。」

志保「黒羽くんって雷苦手？」

快斗「苦手・・・なのかな。俺の親父が死んだ日、雷がすごくてさ。
それから雷がなるとよくそのときの『』と思いつ出すんだ。」

「志保「そう。」

快斗「・・・知つてる？雷つて元々は『神が鳴く』って書くんだぜ。」

昔は『神様の仕業』って考えられていたらしい。」

志保「神様ねえ。」

昔、まだお姉ちゃんが生きてた頃、私は神様にお願いしたことがあ
つた。

『お姉ちゃんを幸せにしてください』『私とお姉ちゃんを組織から
助けてください』つて。

志保（神様・・・）

そこで快斗があ、と声を漏らす。

快斗「やんできた。風も弱くなってきたし。・・・」れなら行けるかな。」

志保「え？」

私は黒羽くんの後ろをついて行った。

靴を履いて外に出る。

先生達に見つからないよう静かに。

こうこうところでは昔の経験が役に立つ。

黒羽くんは怪盗キッドの、私は組織だったときの・・・。

志保「ちょっと? 行くのよ。」

快斗「前にここに来た時見つけたんだ。今年は見れるか不安だったけどよかつた。」

黒羽くんにつれてこられたところには小さな光がたくさん散らばっていた。

志保「螢・・・久しぶりにみたわ。」

快斗「ん? みたことあつたのか。」

志保「ええ。灰原哀だつたころに円谷くんが

私と吉田さんのために一人で探して見せてくれたのよ。

ほんと、綺麗よね。」

快斗「へー。今のオレとその小学生のそのときの気持ち多分一緒だろうぜ。」

志保「?」

快斗「お前を喜ばせたいっていう気持ち。」

黒羽くんはニッ、と笑った。

快斗「それより、今日はあの腕時計してないんだな。」

志保「え？」

快斗「ほら、お姉さんの形見の。いつもつけてんのに今はつけてないから。」

私の大切な腕時計・・・。

あれは私と工藤くんがまだ小学生の姿で出会つて間もないころ、工藤くんが私に渡してくれた。

『明美さんが亡くなつたときにつけてた腕時計だ』って言つて、
けど、私はいらぬ、って言つた。

なのに彼は『大事に思つてた人だろ？大事に思つてた人のこと、無理に忘れようとするな。

大事に想つてた気持ちを消そうとするんじゃねえ。・・・明美さん
の分まで俺が守つてやつから。』

あれから私は常につけていた。

今日は雨に濡れて壊れないようにカバンの中に入れた。

志保「カバンの中にあるわ。」

快斗「そつか。それじゃあ、そろそろ戻るつか。先生に怒られるのも嫌だし。」

そして私達はキャビンへ帰つていつた。

志保（え？ない・・・たしかにココに入れたはずなのに）

私が帰ってきたとき部屋の中はまだ騒がしかつた。

和は外から帰ってきてすぐにはカバンの口を探した
カバンの中身も全て出して探してみたが見当たらない。

そのとき、後ろから声をかけられた。

「富野さんが探してるのはあの傷だらけの腕時計?」
振り返ると茜が軽く笑みを浮かべて立っていた。

茜「うん。知ってる。ケスツ。」

元集

な所の上に置いたわよ。

志保一
そう。

私はそれだけ聞くと急いで外に飛び出した。
外は再び大雨で、遠くでは雷も鳴っている。
でも、今の私にそんなことどうでもよかつた。
あのときの茜の意味ありげな表情も気にしなかつた。
とにかく腕時計を見つけるためだけに走った。

茜が言つていた場所に着いた。

志保（ない・・・・・）（ここあるのよ・・・）

新一 SIDE

そのころキャビンでは蘭と園子から志保がいなくなつた、と聞いた。

新一「蘭！志保はいつになくなつたんだ？」

蘭「40分くらい前。部屋の前の廊下で見たよ。トイレに行つた
と思つてたんだけど

なかなか帰つてこないから、心配で・・・」

快斗「キャビンの中探してみたけどなかつたぜ。」

園子「女子トイレも全部探したけど・・・」

新一「となると、外か？」

蘭「でも、外つてこんなに雨が降つてゐるのに。
こんな中歩いたら危険だよ！」

そのとき、俺は妙な動きをする人物を見た。
青ざめた表情で窓の外をチラチラと見ている。
その女の傍に行つた。

新一「おい、おめー何か知つてんのか？」

すると女はフルフルッと首を横に振る。

園子「そういうえば、前本さん志保ちゃんと二人で何か話してたわよ
ね？」

新一「本当に何も知らねーのかよ！」

茜「と・・・時計・・・

新一「あん？」

茜「腕時計を探しに行つたの。富野さんは。」

新一「腕時計つて、もしかして・・・」

快斗「お姉さんのじやねーか。カバンに入れてるつて言つてたけど、

わざわざつけてなかつたし。」

「そ「」で茜は「」めんなれこ、と言つて腕時計を出した。

新一「なんでオマーがこれを持つてんだ?」

茜「ち・・・違うの!…ちよつとからかおうと思つただけ…・・・」

あきらめて帰つて来たらちゃんと返すつもりで…・・・」

新一「何でオマーが持つてゐるのかを聞いてんだ!…」

俺は冷静ではいられなかつた。

アイツにもしものことがあつたら、と思うとだまつていられなくて、この女の胸倉をつかんでアイツの居場所を聞きだし、外に出た。

大雨の中、傘もささず、ただひたすら走り続ける。

そんな時、俺の目に映つたのは暗闇のなかフラフラしながら草むらを歩いているアイツだった。

志保（頭がクラクラする・・・）

もう限界だつた。いくら夏とはいえ、雨に1時間以上も打たれ続けていたら体も冷える。

「志保…」

「…」がで声がするが辺りが暗くて何も見えない。

「志保…」

志保「工藤くん…」

志保の瞳に声の主が映ったときにはその人物は志保を抱きしめていた。

新一「大丈夫か?」

志保「なんとか、ね…。」

新一「オメー体冷えすぎだな。」

志保「雨にぬれてるんだから、当たり前で、しょ。」

そういつた後、私の目の前は真っ暗になつた。

茜「飯野さん…」・・・・・「めんなさこ・・・」

目が覚めると前本さんがいて、腕時計を返してくれた。

私は前本さんからそれを受け取つてその時計をギュッ、と握りしめた。

志保「もひ、いいわよ。ちやんと返してくれたんだから。
(よかったです、お姉ちゃん…。)

ガタンゴトン、ガタンゴトン……

ドサツ

志保「？そこ」、蘭ちゃんと園子さんの席なんだけビ。」

新一「席かわつてもらつた。」

志保「・・・そつ。」

新一・志保「・・・」

新一「なあ、俺なんかしたか？」

志保「はあ？」

新一「お前にじんとうじゅうと超感じ悪かつたし……いつもに増して。

人をバイキンみたいに。」

志保「はあ・・・あなたほんと鈍感ね。女子がそんなことするのって意識してるから、とか考えないの？」

新一「意識してたのか？」

志保「さあね。今のは普通の女の子の場合。」

新一「オメーも普通の女子だろ。」

志保「自意識過剰。」

新一「なんだよ。かわいくねーな。俺は素直にならうとしたんの。」

志保「？意味がわからないわ。」

新一「そうだな。簡単に言うと、俺はお前が好き、ってことかな。」

志保「何言つてるのよ。ふざけないでくれる?」

新一「ふざけてねーよ。俺の本当の気持ち。

俺は志保が俺のことどう思つてゐるか聞きたい。

志保「…私は…」

想い出はいつもまぶしくて痛みと切なさを伴つ19歳夏

初めてのキス

1話・19歳夏・神鳴（後書き）

砂時計1巻の後半の部分からのお話です。
台詞は新志風に改造しています。

「ずっと、ずっとずっとあなたのそばにいたい
それだけが願いのはずだった。」

別れは突然やつてくる。

志保「・・・イギリス？」

快斗「そう。世界を飛び回って親父みたいなマジシャンになるんだ。

最初はイギリスで修行！」

志保「やつ・・・。」

黒羽くんがいなくなる。

組織を抜けてから、何度も私や工藤くんを助けてくれた。
組織との戦いのときもある白い怪盗の姿と一緒に戦ってくれた。
黒羽くんがいてくれたから私たちは今も生きていられる。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

新一「ああ、快斗のこと？イギリスに行くって言つてたな。俺も昨日聞いた。」

志保「ほんと、黒羽くんの言つことはいつも急よね・・・」

新一「ま、でも仕方ねーよ。親父さんの仇を討つて、やつと自分の夢を叶えようとしてんだ。」

「いつまでも組織のことばかり気にしてられねーよ。」

志保「・・・そうね。黒羽くんには感謝しないといけないわね。」

時間はゆっくりと、けれど確実に私達の関係を変えてゆく
このまま時間をくい止めたいたい。それでも変化は突然訪れる

志保「ただいま、博士。」

博士「お帰り、二人とも。そうじや、志保くん。お密さんがあえて
おるだ。」

志保・新一「お密さん？」

靴を脱ぎ、阿笠邸のリビングに三人並んで入っていく。
リビングに入った先で工藤くんと私の目に入ったのは
私と同じような色の髪の老婦だった。
手にしていたマグカップを机に置き、こちらを見る。

新一「あの・・・」

志保「お、ばあちゃん・・・」

新一「え？」

老婦「志保。久しぶりね。」

私は覚えていた。

この声、この笑顔、この優しい雰囲気。
私が大好きだった祖母だ。

志保「おばあちゃん・・・よね？」

私がそう問うと何も言わずに優しく微笑んだ。

」の表情はどこか私のお母さんによ似ていた。

老婦「大きくなつたわね。」

おばあちゃんはもう言つて私の頭をなでてくれた。
こいつやつてなでてくれるこの手も、私は大好きだつた。

両親がまだ生きていたころ、私とお姉ちゃんはよくおばあちゃんの家に行つていた。

だけど、私が組織に入れられておばあちゃんと会う機会はなくなつた。

両親もお姉ちゃんも、おばあちゃんの話はしなくなつた。
それから、両親が死に、組織が人を殺している場面もよく見るようになつた。

そして、思った。おばあちゃんも死んだんだ、ヒ。

でも、今、ずっと死んだと思っていたおばあちゃんが私の頭をなでている。

志保「おばあちゃん・・・」

老婦「よかつたわ。また会えて。」

そこに、ずっと私の横に立つてこの様子を見ていた工藤君が疑問を口にした。

新一「あの、あなたは・・・」

すると、おばあちゃんは私の頭から手を離し、先ほど座つていたソファに腰をおろした。

工藤くんと私もそれに続く。

「私は志保の祖母のマリーと言います。

何日か前にFBIの方たちが私の家に来て、志保のことを見きました。

そして、一田志保を見たくてこひして來たのです。」

FBIが家に来て私のことを聞いたなら組織のことも知っているだらう。

お父さんやお母さん、お姉ちゃんが死んだことも。

まさか、血の繋がった家族がこの世にいたなんて思わなかつた。

まして、おばあちゃんに会えるなんて考えもしなかつた。

その後もいろいろと話をし、おばあちゃんは一週間ほど阿笠邸に滞在することになつた。

志保「おばあちゃんは、寂しかつたでしょうね。」

新一「ん？」

翌日。

学校からの帰り道。私は工藤くんと一緒に帰つていた。

志保「おばあちゃんは、おじいちゃんが死んで、お父さん、お母さん、お姉ちゃんが死んで

ずっと、一人で寂しかつたでしょうね。」

新一「迷つてんのか？おばあさんとイギリスで暮らすかどうか。」

志保「迷つてないわ。私はここに残る。食事を作る人がいなかつた

ら博士、今よりもっとメタボになるわ。

それに、解毒剤を服用した工藤くんの身に何が起こるかもわからないし。」

本当はそんな理由じゃない。ただ、工藤くんと離れたくないだけ。本当に本気でそう思うのに

新一「俺も博士も大丈夫だ。俺は何回も志保の検査を受けたけど何の異常もねーし、

博士のことはけやんと俺が見ておく。

でも、志保がここを離れられない理由はそれだけじゃねーんだろ?」「

志保「・・・」

新一「心配すんな。

俺は離れてても気持ちは変わることなんてないから。それにはどうしても会いたい時は会いにいける。だから、行つてこい。」

志保「工藤くん・・・私、工藤くんと一緒にいたい。ずっとずっと。」

でも・・・・・・。」

新一「いいよ。俺はいつまでも待つから。

ちゃんと迎えに行つから。な?」「

志保「・・・わかったわ。私、イギリスに行つてくる。」

「博士、おばあちゃん。私・・・」

『工藤くんが迎えに来てくれるまで』

そう心に決めて、私はおばあちゃんトイギリスで暮らすことにした。

蘭「どうして…どうして志保ちゃんも行くの？」

園子「快斗くんのせじよー！」

快斗「なんでだよ。」

私は今、両手に大きな荷物を抱えて空港にいる。

見送りに来てくれた蘭さん、園子さんには私がイギリスに行く、と
決めた翌日に話した。

それからずつとこの調子で私を日本に残るよう説得していくのだ。
私が急遽、おばあちゃんと一緒にイギリスへ行くと決めたのは
蘭さんや園子さんの説得に乗ってしまわないようにするためだ。
今でも、こうやって説得されたら決心が鈍ってしまうくなる。

でも

永遠の別れじゃない。気持ちが離れるわけじゃない。

博士「志保くん、元気でな。無理はするんじゃないぞ。」

志保「わかってるわよ。人のこと心配する前にまずは自分の心配をしてほしいわ。」

- - - - -

快斗「何で止めねーの？余裕？それとも意氣地がねえの？」

新一「……どうでもねーよ。」

快斗「本当はケジメのつもりだったんだ。俺なりの。

きつぱり諦めるつもりでイギリスト行き決めたんだ。で

も・・・

新一「おい！《誰を》だよ。《でも》なんだよ！！」

志保「工藤くん。」

私が来たとたん、黒羽くんは足早に去つていった。

新一「おいー待て！ー」

志保「どうしたの？」

新一「いや、なんでもねー。」

志保「工藤くん、私たちと一緒に帰つてくるわ。だから・・・」

そのとたん、私の体は工藤くんの体に包まれた。

志保「ちよ、ちよつと顔見てるわよ。」

新一「別にいいんだよ。」

志保「じゃあ、工藤くん。行つてきます。」

私はできるだけ笑顔でそう言った。

そして、脣が重なった。

新一「いってらっしゃい。」

”誰そ彼”が愛しい人をさらつてく19歳 秋

2話・19歳秋・誰そ彼（後書き）

マリーって・・・

自分で考えておきながら納得いきません。
でも、外人さんの名前ってわかりません・・・

なーんか、納得いかない・・・

3話・20歳春・桜（前書き）

日本といギリスって、季節違う……。
でも、面倒くさいのでイギリスも日本と同じ季節といひとこ。
それと、私英語の「」とはよく……とこいつ全く分からないので
外人さんも日本語しゃべっています。
実際には英語をしゃべつてると思つてください。

3話・20歳春・桜

工藤くん、元気にしてますか？

日本を離れて半年が過ぎ、

私は無事にイギリスの製薬会社に入社しました。

でも・・・

「富野志保ってあなたのこと？」

志保「ええ、そうだけど・・・」

「よかつたー、同年代の子がいて。あつ！私リマーニ・よろしくねー。」

「志保「よろしく。」

（なんか、園子さんみたい・・・）

とりあえず私は元氣です。

志保「ええ、同じ会社の人で、園子さんみたいな人がいるのよ。

最初ははつきり言つての人と一緒に仕事なんてできるわけないって思つたけど

知識に関しては以外と凄いのよね。

仕事もちゃんとするし。新しい薬の開発も順調なのよ。

「新一「・・・お前・・・俺がいなくても元氣だな・・・」

（いつもよろしく話すし・・・）

18歳の春、あの薬を飲んで組織を抜け出して
工藤くんと子供の姿で出合つた。そして元の姿に戻り、恋をして。
今はいわゆる『遠距離恋愛』とこうやつで・・・

志保「久しぶりね」

新一「ん？」

志保「電話。」

新一「ああ、ちょっとある事件に手に負ってよ。やつと今日解決したんだ。」

志保「・・・腕落ちたんじゃない？」

新一「バー口一。んなわけねーだろ。」

今回の事件は犯人が複数いて大変だったんだよ。

あーそれと、オメエもうすぐ誕生日だろ。なんか欲しいもんあるか？

買って送る。俺、よくわかんねーし。」

志保「別に何もいらないわよ。」

新一「遠慮すんな。あつ、でも常識の範囲でな？」

志保「じゃあ、考えとくわ。」

もうすぐ私は20歳になる。

志保（欲しいもの・・・『フサエブランド』の新作のバッグ？『プラダ』の洋服？）

「はあ・・・」

でも本当は・・・

本当はプレゼントなんていらない

会いたい。

私はリマを連れて前に黒羽くんから聞いていた黒羽くんの大学に来

リマ「はあ。いいね。志保は・・・

あたしなんて・・・あたしなんて・・・一生片恋のま
ま終わるのよ・・・！」

一生純潔を守るのよ――うわー。」

志保「何?ビデウしたのよ。こきなり・・・」

リマ「アランくん・・・」

志保「え?」

リマ「アランくんっていうね、マジシャンがいるの。まだ大学生な
んだけど・・・

毎朝電車が一緒に毎日会つけたり好きになっちゃった
のよ。」

志保「それなら話しかけてみればいいんじゃない?」

リマ「そんなことできないわよー!彼はそれなりに有名な人だし
私のことなんか眼中にないのよ。」

志保「・・・そういうえば・・・大学生のマジシャンって言つたわよ
ね?」

リマ「うん・・・

志保「彼に親しいマジシャン仲間とかライバルとかつて
いる?」

リマ「えつと・・・親しいかどうかは知らないけど、

前に同年代の日本人の男の子と一緒にショートで出てた

よ。確か・・・」

た。

黒羽くんは日本の高校を卒業してからイギリスに来た。しかも、黒羽くんの引越し先が私の住むところと近く、電車ですぐのところらしい。

快斗一志保？」

志保「久しぶりね。」

快斗「だな。でもソレが?」江南とソレ。

「かーいーとー」

志保の言葉を遮り、大声で叫びながら黒羽くんのもとに誰かが走つてやってくる。

快斗「おーアラン！」

和訓 異音

快斗「で？志保、このいつがアランだけど……このいつに何か用か？」

黒羽くんがアランくんの服の袖を引っ張る。

その横で本人は何がなんだかわからない、といった表情をしている。

志保「用があるのは私じゃなくて、一の子……」

リマ「あのーー！今度の土曜、志保の家で志保の誕生日やることですーー！
来て下さいーー！お友達も一緒にーー！」

快斗（お友達？）

志保（また勝手に・・・）

志保「『めんなさい』・・・なんか変なことになっちゃって。」

快斗「別に、いいけど。」

あの後、リマはアランへと話してこの仲良くなり、アランの交換もしていた。

志保「誕生会なんて、灰原哀の時以来だわ。」
快斗「……そつか、誕生日だけ。何か欲しいものある？」
志保「何もいらないわよ。手ぶらで来て。それじゃあ、私二つちだから。」

何もいらない。会いたい。

家に着くと、私の携帯が震えた。

投票を開き、通話が終ると、一聲聞かぬか。力声が聞こえる

相手が誰かなんて、聞かなくても分かる。

「新一郎、いじらなしね」

志保「そのかわり一回でも余分に電話して。」

ツツ。ツーツー。

私は電話を急いで切った。工藤くんの声を聞いたらなぜか胸が熱くなつて、涙が出てきた。

会いたい。会つて話がしたい。触れたい。触れられたい。

恋しい。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

ピーンボーン

ガチャヤ

リマ・快斗・アラン 「「HAPPY BIRTHDAY...」」

志保 「・・・」

リマ 「あれ? 無反応? おーーーい。」

志保 「え、あつ、ありがとわ。」

快斗 「・・・」

リマ 「ケーキ買つてきたんだよーーみんなで食べ・・・

「..?」

リマ 「あさね、志保。びっくりさせやがた?」

リマが私の顔を心配そうにのぞきこんでいる。

それもそのはず、私の目から涙が流れているからだ。

リマは勘違こしていみた。だ。リマは向むけられない。むじう感謝し

ている。

私はただ、思い出しだけだ。あのときの3人のことを。

「HAPPY BIRTHDAY!!..哀ちゃん!!..」

「灰原さん、お誕生日おめでとうございます。」

「今日はケーキもあるのか?」

「もー、元太君ったら、今日は哀ちゃんのお誕生日なんだから
まずはおめでとう、でしょ?」

「はは・・・わりいわりい。灰原、おめでとう。」

私が灰原哀だったとき、少年探偵団の3人がいきなり博士の家に来た。

そのことは本当にうれしかった。

だけど

あの日、工藤くんだけは風邪をひいて、探偵事務所で寝かされていて来なかつた。

今の状況があの日にそっくりで、工藤くんはいない、と思い知られた。

志保「大丈夫よ。なんでもないわ。ちょっと、昔を思い出しだけ。」

「

R R R R R R R R R R R R R R

そのとき、テーブルの上に置かれた志保の携帯が鳴つた。
画面を見てみるとそこには工藤新一、の文字。

志保「・・・工藤くん?」

新一「誕生日おめでとう。わりい、直接言えなくて。」

志保「別に。」

新一「なんだよ。つめてーな。まあいいや。

とりあえず今から飛行機でイギリス行つから。」

志保「え?」

新一「プレゼントの代わりだよ。明田の朝一でそいつの空港に着くから。

じゅーな。明日ー!」

ブツ・・・

ツーツー

志保(明日・・・)

会える。

快斗SHIDE~

新一と志保が離れて暮らすよくなつて半年。

今日はマジシャン仲間のアランと、アランに惚れているとかこうつ
マッテ子と

志保を楽しませるよくな誕生会をする

・・・つもりだったが、志保はいきなり泣き出した。
最初はうれしく泣きかとも思つたけど違つた。

『昔を思い出した』

昔つていうのは灰原哀の「」とか、灰原哀になる前の宮野志保の「」のことだね。

そこで、俺とアランはマジックでもして喜ばせようか、と考えた。
そのときアイツから電話がかかってきた。

『工藤くん?』

新一のことは別に嫌いじゃない。大切な友達であり、大切なライバルだ。

だけど、新一と話す志保の顔を見ると辛くなる。

さっきまで泣いていたのに、新一の声を聞いた途端、志保の涙は止まった。

なんだか、イライラする。

せっかく志保のために買ったプレゼントも今日は渡せそうにない。

そう思つて、俺は小さな長方形の箱をポケットにしまった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

待ち合わせした場所に来た。

まだ工藤くんは来ていない。

私はなぜか落ち着かなくて携帯に表示される時間を見たり、キヨロキヨロとあちこちと見回したりしていた。

私らしくない、と自分でも思つ。

工藤くんと出掛けるといつも事件を呼び込んでいた。

もしかしたら今日も彼の周りで事件があつていいかもしない。

そんなことを考へていると、自分の名前が呼ばれた。

「志保？」

志保ドキッ

新一「よつ・久しぶりだな。」

志保「久しぶりね。元気そудよかつたわ。」

新一「ああ、何?心配だつた?」

志保「別に。ただ解毒剤の副作用とか出てないかなつて。

それより何処行きたいの?」

新一「んー、志保に任せる。俺、イギリスつていつたらロンドンに行つたことがあるぐれーで

他はあまり知らねーんだよな。」

志保「じゃあ、とりあえず近くの公園に行く?」

新一「おつ、いいな!」

私達は公園に着くと、ベンチに腰を下ろした。

新一「へえー。けつこうい場所あんだな。」

志保「気に入つた?この公園ね、想い出の場所なの。」

新一「想い出?」

志保「昔、家族で何回か来たの。おじいちゃんもおばあちゃんも両親もおねえちゃんもいて・・・

楽しい想い出がたくさんあるのよ。」

実は、工藤くんがこっちに来たら一度は一緒に来たいと思つてたからよかつ・・・」

工藤くんは私の言葉を遮り、私の唇を工藤くんの唇が塞いだ。

志保「ちよひ、ちよひとー」

新一「・・・言つていー?」

「会つたかった。」

そつぱつと、工藤くんは再び顔を重ねた。

その後も、いろいろなところを見て回つた。
小さなハートのついた指輪を買つてくれた。

中学生のお小遣いで買えるほど安い指輪だったけど、私は内心、
凄くうれしかった。

ただ、横に並んで歩くだけでもうれしかった。
しかし、時間はとまつてなんかくれない。

新一「俺、そろそろ・・・」

志保「そつね。」

時計を見ると、もう8時を回っていた。
工藤くんは最終便で日本に帰る。

新一「じゃあ、またな。」

志保「ええ、楽しかったわ。8月のお盆には帰るから。」

新一「おづ。待つてる。」

工藤くんは日本に向かつて飛びたつて行つた。

幸せな時間が過ぎると、じつじょいつもなく寂しくなる。
それは私が贅沢になりすぎただけかもしない。
自然と涙が溢れてくる。

「志保？」

そう呼んだのは工藤くん?いや、違う。

声も顔もよく似てるけどこの人は工藤くんじゃない。

志保「黒羽くん……」

快斗「新一は?会つてたんだろう?」

志保「ええ。」

志保「じゃあ、私は帰るから。おばあちゃんの夕食も作らなこと。
またね。」

快斗「志保!これ……」

志保「何?」

快斗「誕生日プレゼント。昨日渡しあげられたから。」

志保「別にいって言つたじゃない。」

快斗「大したもんじゃねえよ。なんとなく志保に似合つてやつだつた
から。」

黒羽くんに渡された箱をゆっくり開ける。中からは綺麗な水色のビ
ーズがたくさんついたものが出でてきた。

志保「ホーム?綺麗ね。」

快斗「つけてみてよ。」

私は黒羽くんに言われたとおりそのホームをつけてみた。

志保「どう？」

快斗「いいじゃん。」

志保「ふふ。私もこれ、気に入ったわ。本当にありが……」

その瞬間私の頭は黒羽くんの手で支えられ、唇を塞がれた。

快斗「おやすみ。」

黒羽くんはそう、一言だけ言つと帰つていった。

静かな静かな春の夜のことでした

3話・20歳春・桜（後書き）

快斗くん一人称を入れてみました。
志保以外の人物の一人称の場合は～SIDEと表示する]ことにします。

この話は基本的に志保ちゃんの一人称なので
志保ちゃんの場合は表示しません。

4話・20歳夏・月の家（前書き）

軽くR15?あります。

4話・20歳夏・月の家

リマ「ねえ、志保。夏は日本に帰るの?」

志保「ええ。約束してるから。」

リマ「快斗くんも?」

志保「さあ、私は何も。」

黒羽君は組織のアジトに乗り込んだとき
一緒に戦つた大事な友人で

それなのに

あんなキス

笑い話にもならない。

マリー「じゃあ、気をつけて行つてらっしゃい。

新一くんにも阿笠さんにも宜しく。

志保「ええ。行つてきます。」

私は飛行機に乗った。

窓の外を見ると飛行機は雲の上だった。

田をつぶると思い出す。

あの日のこと。

不意打ちだったとはいって、工藤君にどんな顔して会えばいいんだろう。

目を開けると、いつの間にか日本に着いていた。
どれだけの間眠っていたのだろう。

凄く長い間のような気がする。

飛行機を降りると、私の目にずっと会っていたかった工藤くんが映った。

新一「おかえり。
志保「ただいま。」

工藤くんは私に笑いかける。

でも、そんな笑顔、私にはつらいだけ。

イギリスでのことを何も知らない工藤君に罪悪感しか残らない。

付き合つたばかりの頃、私とジンが男と女の関係だったと工藤君が知ったとき、

彼は凄く怒った。私に怒ったのではなく、ジンに。そして自分に。

私はそこに愛なんてなかつた、と言つたけどそんな言葉が通用するわけもなく

無理やり私の唇を奪つた。

そして私は見てしまった。

工藤くんの悲しい顔を。

そのときから私は工藤くんにあんな顔を一度とさせないよつこじよ
うと心に決めた。

だからあのことにされる。
なのに、なんで……

志保「黒羽くん……」

新一「あつ、マジかよ。アイツも帰つて来てんのか。」

私と工藤くんが見たのは博士の家に入ろうとする黒羽くんだった。
黒羽くんも私達に気づいたようでのんきに手を振つている。
もう忘れたのだろうか。

あの出来事以来、黒羽くんとは会わず、
連絡も取らなかつた。

だから、彼も日本に帰つてくるなんて知らなかつた。

黒羽くんは私達が来るまで、博士の家の扉を開けて待つていた。
どうやら、合鍵を使って開けたらしい。

新一「よお、久しぶりだな。できればお前には会つたくなかった
けど。」

黒羽「それはこっちの台詞。よつ、志保。久しぶり。春以来？」

志保「え、ええ。そうね。」

新一「？」

言葉が詰まつてしまつた。これでは工藤くんが不審に思つてもおかしくない。

工藤くんは案の定、怪しい、といった顔つきで見つくる。

新一「オメハ、向いつで会つてねーのか？」

ああ、工藤くんが疑問に思つたのはそつちのこと……。
よかつた……。

快斗「ああ、新一が来た日にたまたま会つて、それ以来。

俺もマジシャンの仕事で忙しいし。大学もあるし。」

新一「お前もちゃんと向こうでやつてんだな。」

快斗「まあ、一応は。」

黒羽くんはさうい。自分で全てを忘れたみたいに普通に私にも上藤くんにも話しかける。

快斗「じゃあ、俺は先に手洗つてくるから

新一と志保は博士に挨拶してきたら?」

新一「お前も先に挨拶くらいしろよ。」

快斗「俺は三日前にしたぜ? 俺は志保より早く着いてんの。」

そつこねば黒羽くんが持つている荷物は泊りがけにしては少な過ぎる。

入つてゐるのは財布と携帯くらいだらうか。

といつより・・・

新一「つて、オメエここ泊まんのか?」

黒羽「ああ、そうだナゾ? 三田間すつといひに泊まらせてもらつた。

母さんも寺井ちゃんも何があるかしらねーけどしないみてーだし?」

新一「そういや、快斗の親もお氣楽主義だったよな。」

快斗「ああ。つたく、息子が帰つてきてるつてのこどいで向してんだか。

それより志保、早く行つてあげねーと。博士、志保が来るのすげー楽しみにしてたから。」

そう言つと、黒羽くんは洗面所のある部屋へと向かった。

新一 SIDE

久しぶりに会つた志保はなんだか様子があかしかつた。
快斗のことを睨んだり、俺と話していくも目を合わせなかつたり。
快斗の行動をいちいち気にして、わざと距離を開けているようにも
見えた。

それに、志保が日本にいたときに俺が博士の家に泊まつていいかどうか聞いたら

いつも決まって、『自分の家が隣にあるんだから家で寝なさい』って言つてたのに

今日は、自分から泊まつてけば?なんて・・・。

まあ、それは久しぶりに会つた志保なりの愛情表現かも知れねーけど・・・。

イギリスで何かあつたのだろうか。

俺の知らないところで・・・。

それとも俺の考えすぎか?

俺は結局、今までの三日間快斗が使つていた部屋で快斗と一人で寝ることになつた。

新一「- - - なんでおメエとふとん並べて寝なきゃならねーんだよ。」

快斗「嫌なら、自分の家に帰れば?俺は止めねーよ。」

俺は、仕方なくふとんに入った。快斗も横で俺に背を向けてふとん

に入つてゐる。

新一「オメエさ、志保と向こうで何かあつたのか?」

快斗「・・・」

新一「／＼／＼／＼／＼（へそ。何言つてんだ俺）・・・やつぱいい
！忘れる。」

快斗「・・・志保は新一の」としか見てねーよ。」

新一「知つてゐる。」

快斗「（イラ・・・）」

新一「けど、こくら俺が探偵でも傍にいねえとわからんねえこともあ
るし。」

快斗「・・・」

志保「（眠れない・・・。）」

飛行機で長い間寝ていたため、なかなか寝付けない。
気分転換にキッチンに行つて水でも飲むことにした。

キッチンに行つてみると明かりがついているのが見えた。

志保「（博士かしら。）」

快斗「志保？」

志保「黒羽くん・・・まだ起きてたの。」

快斗「ああ、ここんとこ夜型だつたから寝れなくて。」

気分転換に水をな。そつちは？」

志保「私も。」

私は水をコップに注ぎ、急いでそれを飲み干した。

志保「じゃあ、おやすみ。」

快斗「志保。」

あまり一人で同じ空間にいたくなくて急いでキッキンを出ようと
たのに

黒羽くんに呼び止められた。

快斗「まだ怒つてんの？俺がキスしたこと。」

志保「…」

快斗「悪かったよ。あれは冗談だから忘れて。」

志保「…ふざけないで…！冗談でもしていい」とと懲りことがある…

感情的になつた私の肩に何かが触れた。

それは工藤くんの手だった。

志保「くど…」

新一「お前ら声でかすぎ。寝れねーよ。」

その瞬間、工藤くんの拳が黒羽くんの頬に直撃した。
そして、私の腕を掴みどこかへ連れて行こうとする。
博士の家を出て、着いたのは工藤くんの家だった。

志保「工藤くん…ごめんなさい。でも、あれは冗談だったって、

黒羽くんも…

新一「バカかお前は…！隙見せてつかうだろー！」

私に怒鳴つた工藤くんの口はあの時と同じ悲しい口で、見ていられ

なかつた。

新一「わり。分かつてんだ。快斗が勝手にやつたつてことくらい。
お前が悪いわけじゃないことも。けど、イラついてど
ーしようもねー。

俺の知らないところで他の男がお前に触れたりキスし
たり、

そういうの考えるだけでたまんね。
ガキなんだよ、俺は。」

志保「・・・」

新一「・・・よし、忘れる。お前ももう忘れる。」

志保「ねえ、工藤くん。」

私は工藤くんを自分に振り向かせ、キスをした。

その後も私は博士の家には帰らず、工藤くんと一緒にベッドに入っ
た。

そして、私達は始めて体を重ねあつた。

甘い甘いこの夜を

溢れる熱情を

月だけが見てた。

4話・20歳夏・月の家（後書き）

なんか、砂時計の漫画を読みながら書いたので、
キャラが違うかもしません・・・

快斗の性格がいまいちわからなくて、
全然別人になっちゃいました。
快斗ファンの方、申し訳ございません。

20歳秋・空蝉（前書き）

サブタイの年齢はすべて志保の歳です。
たしか新一たちより一つ年上だったような・・・

20歳秋・空蝉

新一 SIDE

新一（うー、さみい。朝晩冷えてきたな。）

俺は大学から帰ってきて、すぐに夕飯の材料を買いに出かけた。
今はその帰りだ。

夏が終わり、季節はもう秋だ。
つい最近までスーパーまでの裏道も蝉が鳴いて騒がしかつたが、
今は静まり返っている。

志保がイギリスで暮らすようになつてから、
自分と博士の分の夕飯は俺が作るようになった。

志保が博士の家を出て行くまでは料理など、ほとんど作ったことが
なく、
最初のうちは包丁もまともに使えず、料理が出来上がるには
調理開始から3時間も経つていたりした。

しかし、博士の健康を第一に考えていた志保を思い、
大学の授業がどんなに遅くなつても、警察に呼ばれても、
外食はせず、志保が置いていったレシピを見ながら毎日、時間をか
けて作つていた。

新一（今日は秋刀魚だな。ふつうに塩焼きでいいか。）

そんなことを考えながら薄暗い道を歩いていると
男の声が聞こえてきた。

男「だからー友達からでいいって言つてんだろーーー。」

新一（告白かー？）たぐ、近所に丸聞こえだつた。もうちょっと
場所考えろよな。

・つて、蘭ー？
相手の子もあんな告白でOKなんであるはずない・・・

おーおー、またかよ。モテる女もつらにな。）

男はジーンズを腰で履き、上には派手なTシャツ。
せうに金髪、耳には多くのピアス、と見た目からしてガラの悪い男
だった。

蘭「…………だからー迷惑なんです。こいつやって待ち伏せされ
るもの……。」

男「けど、お前いつも俺を避けて言つ暇ねーからー。」

蘭「そういうのもやめてくださいってはつきり言つたでしょうー？
後なんてつけてこないでください。あまりしつこと警察
呼びますよーー！」

男「つ、人が下手に出でりやこの女ーー！」

ガシッ

蘭「きやつ」

男は蘭の態度に腹を立てたらしく、蘭の腕を引っ張った。

蘭「離してーー！」

新一「乱暴はよくないんじゃないですか？」

最初は話に入るつもりはなかつたが、このままでは男が手を出しか

ねないので

俺はあわてて男の手を蘭の腕から振りほどいた。
案の定、男は俺を睨みつける。

男「誰だよ。お前。」

新一「コイツの幼馴染ですよ。俺、多少警察と面識あるんですけど、
まだコイツに関わるつもりなら知り合いの刑事呼びますよ？」

俺が、そういうと男は大きく舌打ちをして去っていった。

新一「ガラ悪い。。。つーか、あんな奴、蘭の一蹴りでどうにかな
るだろ？」

蘭「そ、そうだけど。。。『ごめんね、新一。助かった。』

新一「 - - - 大丈夫か？」

俺の問いに蘭は無言でうなずく。

なんだか、蘭がおかしい。

いつもならあんな男くらい、俺が助けなくとも蘭ならどうにかでき
たはず。

それに、表情も暗い。何か思いつめたような、そんな顔だ。

新一「家に帰る途中だったんだろう?もう暗いし送る。」

そつと置いて、俺たちは並んで歩いた。

蘭「懐かしいね。」うして並んでると高校時代に戻ったみたい。あ
つー「

蘭は何かを見つけたようで、一本の木に近寄つていいく。

新一「何?ああ、蝉の抜け殻か。

まだ残つてんのかよ。もう夏は終わつただ。

中身はとっくに死んでんのに皮だけ。しぶといな。」

蘭「ふふつ。子供のころ一緒に蝉採りしたよね。

新一は子供のくせに『んな、ガキみたいなことができつかよ

つて言つてたけど

結構、楽しんでたし。

それで、新一が採つた蝉を家に持つて帰つたら、一日中鳴き続けて

『うるさいから、逃がしなさい』ってお母さんで怒られて。でも、私は私に似てるって思ったの。』

新一（蝉??）

蘭「ほら、新一も知つてるよ!」、うちつて、両親あまり仲よくないじやない?

お互に愛があるつていづのは分かるけど、よく夫婦喧嘩してたから、家族で会話することができなかつたの。

家中静かで息が詰まりそうだった。

だから私がしゃべり続けたの。

蝉みたいに一田中。

何年もギーギー、一人でしゃべり続けたの。

何かが変わると思つてた。私が変えられるんだと思つてた。でも・・・私、もう限界。

私は何のためにあの家にいるんだろう・・・』

新一「蘭・・・」

蘭「- - -つ」

新一「オイ!」

蘭「- - -ごめんね。送つてくれてありがと!」

蘭は涙声で俺に礼を言つと、走つていぐ。

そんな蘭を見て、俺は蘭を呼び止める。

新一「あー、あれだ！しばらく博士んちにいろよ。

博士も俺以外に家に来ることがないから寂しがつてゐ

し、

夕飯も、俺じゃつまいの作れねーし。」

蘭「・・・うん。」

あれから、俺は蘭を連れて博士ん家に帰つた。
博士は久しぶりに蘭と会えてうれしそうだ。

うまい夕飯も食べれたし、今日蘭をつれてきてよかつたと思つ。
蘭も落ち着いたようで、博士と笑顔で話している。

夕飯を食べ終え、皿の片付けは蘭と俺でやる。

新一「なあ、蘭。」

蘭「何？」

新一「本堂瑛佑って、覚えてるか？」

蘭「うん。瑛佑くんがどうかしたの？」

新一「ああ、今アイツ、アメリカから帰つてきてる。

しばらくは日本にいるそうだぜ？」

蘭「そつか。」

新一「会いたくねーか？アイツは蘭に会いたがつてる。」

蘭「うん、私も久しぶりに会いたい。」

新一「でさ、俺が勝手に人のことべらべらしゃべるのはよくないけ

ど・・・

本堂、オメエのこと好きみたいだぜ？高校の時から。

江戸川コナンの「ひ、アイシ」と言われた。
蘭に告白していいのかどうか。

あの時は蘭のことが好きで、ダメだ、と答えたが、
今の蘭を救えるのは本堂だと想つ。

都合のいい話だが。

新一「本堂は蘭のこと、本氣で想つてる。アイシなら蘭を幸せにして
てくれると思つぜ。」

少し頼りないとこもあるかもしんねーけど。
な？本堂に会つて、ちゃんと考えてやつて。」

蘭「うん・・・

志保SIDEへ

私は夏のあの出来事以来、黒羽くんと顔をあわせていない。
黒羽くんを嫌いになつたわけじゃない。
ただ、なんとなく顔をあわせづらいだけ。

リマ「しーほ。大丈夫？元気ないけど。」

志保「え？そんなことないけど。」

リマ「じゃあ、考え事してたでしょ？あ！快斗くんのことだー！」

リマには全部話した。

私と工藤くんが幼児化したこと。
私が組織のメンバーだったこと。

両親は私が子供のころになくなつたこと。
お姉ちゃんが組織に殺されたこと。

組織を潰したこと。

そして、あの日の黒羽くんとの出来事もすべて。

リマは私の話に口をはさまずに聞いてくれた。

そして、私の話を聞き終わつた後、彼女はこいつ言つた。

「うれしいー、ど。

私はリマにあまり自分のことを話したことがなかつたから
私がちゃんと話したことがうれしかつたらしい。

過去をすべて話した私にリマはよく相談に乗つてくれる。

特に私から相談を持ちかけることはないが、

私の表情を見て、私が思つてゐることについてアドバイスをくれ
る。

私はそんな彼女に本当に感謝している。

リマ「そりゃ、こきなりキスされて?しかも『冗談』って言られて?

彼氏にばれて?喧嘩して?ってなつたら

許せないかもしれないけど、快斗くんの気持ちもわかるよ、少しだけど。」

志保「黒羽くんの気持ち?」

リマ「うん。快斗くん、『冗談』ってことこじたいんだと思つ。

だって、冗談でそういうことする人じゃないんでしょ?

『本気』だったらTHE ENDだもんね。

志保と志保の彼氏ほじじゃないけど、志保と快斗くん

も同じ戦場で戦つた

運命共同体じやん?

その関係が壊れるのが怖いんじゃない?」

志保「……」

リマ「あと、志保のお姉さんの話を聞いて思つたんだけど、快斗くんと明美さんってなんとなく似てない?」

志保「似てないわよ!」

私はリマのやの言葉に必死で否定する。

リマ「姿形じゃなくて、印象がだよ。」

志保「似てな・・・」

リマ「志保を大事に思つてることとか、影で志保を支えるといふことか?」

私は明美さんのことも快斗くんのこともそんなに知らないから

はつきりとは言えないんだけどね。」

志保「似て、ないわ。」

確かに、初めて黒羽くんと会ったとき誰かに似てると思つたけど・

ピーンポーン

AM7:00

おばあちゃんは昔からの友人と旅行に行つているし

今日は仕事が休みなのでいつもより遅めにおきるつもりだったが、

家に響き渡るインター ホンの音で目が覚めた。

志保（こんな朝早くに誰かしら・・・。）

少し警戒しながら玄関のドアを開けると、そこには黒羽くんがいた。
そして、私は場違いな黒羽くんの言葉に驚いた。

快斗「遊園地行かない？」

志保「は？」

快斗「仕事休みだろ？俺も大学も仕事も休みだから行こよ。」

志保「何考えてるのかしら？」

こんな早くにいきなり訪ねてきて・・・
行くわけないでしょ？」

快斗「嫌ならいいや。じゃあね。」

黒羽くんは私に背を向け、ゆっくり帰つていった。
そのとき、リマが言った言葉を思い出した。

『似てない？』

志保「黒羽くん・・・!!待つて!!行くから!!」

快斗「やった！」

私は新一に言われたように瑛佑くんに会った。

そして、瑛佑くんのこと、ちゃんと考えて答えをだした。

今は瑛佑くんと付き合っている。

今日は高校のクラスメートの何人かで集まつて地域のお祭りにきた。

私は瑛佑くんといろいろな店をまわった。

こここのところ、あまり気分が晴れなかつたから
このお祭りは気分転換にいい。

でも、やっぱり心にあいた穴はふさがらない。

このとき、私も瑛佑くんも、新一も、だれも気付かなかつた。
私たちを睨むような視線が私たちに向いていたことに。

瑛佑「蘭さん、大丈夫ですか？」

蘭「うん、大丈夫。それにしてもこのお祭り、すごいね！！」

私は瑛佑くんにうその笑顔を見せた。

瑛佑「……一つ聞いていいですか？」

蘭「ん？」

瑛佑「どうして、僕と付き合おうと思つたんですか？」

正直、「……そこまで好かれてるとは思えません。

怒らないので教えてください。」

蘭「……今まで、自分が信じてた、夢見てた世界や現実が泡のように消えちゃつて

抜け殻みたいに自分が空っぽになっちゃつて……

だから、誰か私をしつかり捕まえてくれる人がほしく
つて……」

瑛佑「それは、僕の役目ですか？」

なんとなく、見てたら分かります。

蘭さん、本当はまだ工藤さんのこと - - - -

ゴッ

ドサ

瑛佑くんの言葉が続かなくなつたと思ったら、鈍い音がした。

目の前には太い木の棒を持ったこの間の男。

その男の手が私に伸びてきて腕を引っ張られる。

誰もいないところのついたかと思うと、私の体は地面に叩きつけられた。

蘭「やめて・・・っ！放して！！

男「うるせえっ！！」

どんなにもがいても男が私を地面に押さえつけて身動きがとれない。

いつもいつもいつもいつも孤独で

一人で

現実なんてでたらめばっかりで

儚くて

信じられるものなんてもう何もなじって思つてた

今、目の前の君以外には

目の前の男は苦しそうにうずくまつている。

新一が助けてくれた。

新一「大丈夫か？」

私は、新一に抱きついた。

やっぱり、私はこの場所が一番心が安らぐ。

「しん、いち・・・」

- - - - -
志保 SIDE

黒羽くんと私は遊園地の閉園時間までアトラクションに乗っていた。
遊園地に行つた帰りに「コンビニで黒羽くんが花火を買い
家の近くの川原であることになった。

志保「そういえば今年は花火、してなかつたわね。よかつた、今日
できて。」

快斗「花火好き？」

志保「嫌いじゃないわ。」

快斗「そつか。」

志保「あつ、消えたわ。コンビニで売れ残つたものだから運氣で
るのかしら？」

あ・・・ わたくしの口まで。」

私が珍しくこんなにしゃべるのは何でだらう。
真つ暗な空間に私たち2人きりだから?
暗いのが怖いから?

黒羽くんがお姉ちゃんに似ていて安心して会話できるから~。

快斗「志保、灯りつゝず」に、そのまま聞いて。

「オレ、志保のことずっと好きだった。」

多分、初めて会ったときからずっと。

本当はずっと言いたくて言いたくて言いたくて言いた

くて

遊園地より、花火より

本当はそれが言いたくて、今日志保の家に行つたんだ。

今日、付き合つてくれてサンキューな
すっげー楽しかった。」

涙がでた。まるで、黒羽くんがここからいなくなるよつた言い方をするから。

快斗「……あと、それから、キスごめんな。いやな想いでせるつもりなんてなかつたんだけど。

魔がさした。

じゃあ、行くわオレ。」

『快斗くんと明美さんってなんとなく似てない?』

志保「く、黒羽くん!」

快斗「ん?どうした?」

志保「お願いだから、一人で無茶だけはしないで。」

快斗「……オレは大丈夫だから。」

黒羽くんが私たちの前から姿を消したのは

それからすぐのこと

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3572y/>

腕時計

2011年12月21日21時47分発行